

思ふ。云ひ換れば、人格を完成すべき根元は「學び」に有りと斷言し得る「學び」の觀念を持ちたいのである。

最近從來の「學び」の意義が訂正され、その本義に立返へらむとする機運に到來した。即ち「行ひ」と云ふものを「學び」の圈内に呼び戻さうとしてゐる。其れは要するに「學び」そのものの觀念を是正せしむる事である。

其處で私は大和俗訓の文を拔萃し、所謂「學び」の觀念を定義し。結論に代へ様と思ふ。

「學問の法は知行の二を要とす。この二をつとむるを致知力行とす。致知とは、知ることをきはむるなり。力行とは行ふことをつとむるなり。道を知る事明らかならざれば行はれず。たとへば目なきものゝ足すくやかなれど、ゆくべき道を知らで、ゆきがたきがごとし。行ふことするとならざれば、知りても用なし。たとへば目明かなりといへども、足たゞざれば、ゆくことかなはざるが如し。知と行とは目に見て足にゆくがごとし。目くらければ行くべき道見えず。足立たざれば行くことかなはず目足ともにそなはらざれば道をゆきがたきがごとし。知るを先とし、行ひを後とす、萬のこと先づ知らざれば行ひがたし。故に前後をいへば知るを先とす。知るは行はんためなり。知りても行はざれば用なし。故に輕重をいへば行ふをおもしとす。知ると行ふとの二は、一をかくべからざること、鳥の兩翼のごとく、車の兩輪のごとし。學問は知と行と並進むをよしとす。並進むとは、知れることは即ち必ず行ふを云ふ。知と行と、少し

の前後はあれど、さきだちおくれず、一度につれだちてゆくをならび進むといふ。知れるばかりにて行はざるは、ならび進むにあらず。

知行の二の工夫を、こまかにわかつてば五あり。中庸に曰く博く學び、審かに問ひ、愼んで思ひ、明らかに辨へ、篤く行ふ。是れ道を知りて行ふの工夫にして學問の法なり」と。

戰 塵

横 山 是 明

黄昏るゝ湖北の木枯身にしてみて戦友の墓標に聲かくるわれは

召されきて命捧げし身にあれど春近き野に故郷おもふ

朝霧の深くこもれる漢水に流のどかに艦のいこへる

—河南の二葉村に於て—